[illegible]録大[illegible] 之一

特
西垣文庫
文庫10
7389

もしほぐさ第一編

慶應四年戊辰閏四月[illegible]日

最早にヒコサウの新聞誌ありしが、かの人此地を去りしのちハ久しく其事絶たりしに、去年正月我友人ベーリイ萬國新聞紙を板行せしが、これも第十篇迄出板して止ぬ。余深くこのことをなげきおもへらく、新聞紙ハたとへバ有益のものにて、今ハ世界中文明の國にハこのものなき國ハあらず。然に日本にてハいまだこの事さかんに行はれざるゆゑんハ、蓋し新聞紙の世に益ある事をしらず。のみならず、これを編集する人のことばハ學者ぶりてむづかしき支那文字まじりのわからぬ文を用ゆる事と、且ハ出板のおそくなりて時おくれのめづらしからぬ評をのせるところによる

文庫 10
7389
文庫

成るべし余が此度の新聞紙ハ日本國内の時々のさわさわハ勿論アメリカ。フランス。イギリス。支那の上海香港より來る新報ハ即日ふ飜譯して出さるべし且月の内ふ十度の餘も出板さるべしされバ世界諸色の相場をはじめ世間の奇事珍談ふるくさき紀事を加へずのせる事なしまさ確實なる説を探りもとめて決して浮説をのせざるとひとねがふらくハ諸君のおゝく此新報を買もとめられんことを

○アメリカのワシントン。イギリスのロンドン。フランスのパリス其外諸國の繁華なる地ふてハ新聞紙を出板せる處甚多し日々出板せる家もあり二日め三日めに出板するもありて一年内出版の數幾億万といふをしるべからざるなり近來開けたるハワイふてハ五六年前まてハ島人大抵文字をしらざりしに近日ハ追々にひらけて人々文明ふ進ミ毎朝新聞紙を出板せる事七千枚ふ至るといふ支那にても近來香港上海ふて漢文の新報を板行す大抵毎月二万四千枚を賣出すといへり是ハ皆新聞紙を買ふの人前以て週年の價金を板元へ渡置て出板ごとふ新聞紙舘よりもらふ文明の國繁華の地ふて如此新聞紙のさかんに流行せるときハ千里の外ふ奇談珍説坐ながらにして見聞し、門を不出して諸方の物價をしり人の智識をまし心志をたのしましむ、商賈の便利を得るなど其益ある事甚おほかりけるなり余是故ふ日本ふもかゝる新聞紙の盛ふ流行せん事を願ふ也

九十三番
ウエンリート

昨日信州より帰りたる商人のはなしに四月廿二日北部の
會津の兵、水戸、桑名の兵をひきゐて信州の松代をふさぎ
かゝる城主さなだとのけあひにおよびしハ三百年來德川將
軍に屬し其恩を蒙りしをわすれて此度俄に南方の臣
下に屬せしハ何事ぞやかのふに南方ハ天子を挾で權威を
振ふにおそれてなるべしかゝくこゝろをあらためて北部に力
を合せば舊領安堵たるべしめしさきくば德川家よりあたへ
おきたる御墨附をかへせとて嚴しくうけあひ居りしを
現在に見聞してきられりとぞ其後いかゞなりしや北部
の兵卒のいふにはハ松代をうちまく説伏たるを夫より尾張へ
兵をさしむけ勢に乘じて京地に攻いらんとの志也とぞ猶
委しくさぐし求めて此次に出すべし會津より三越を説
伏しハ皆此策を用ゐたりとなん扨其人らすゐの關を通
しがおもらどめられたる者四人ことにきられて關守にむらひさく
いふ曰これらハ美濃の國大垣のものなるが廿一日に宇都宮
の軍にうちまけて馬物具をもすてられ辛うじてこれまで
にげのびてはいかで此關をバ通されたまへ切手をいかにもなど
こうくもひかゞまりて居たり白ねおもむん一枚を着て上にござ
いふものを引かぶりひたるもありしとぞ
○下總のくにこうつの原に屯集せし北部の兵ハ皆江戸に

浪人なり植村某といふ人を使者として四月廿七日に南方の陣中へかけあひに遣ハせしに南軍より鉄砲にて打殺しけるゆへ引続て両軍より砲発におよびつゐに合戦となりしが南方の兵敗走のよし風聞あり南兵ハ彦根藤堂なりとぞきこえたり

閏四月三日舟橋合戦之事

徳川家旗下の士江戸をたちのき安房上総の辺に集居たるしが如何の評議に決したるにや四月廿二日のころ五百人ばかりの勢にて日光山へとこゝろざしておし出しける途中舟橋駅に屯し居たる上方勢よりも兼て八幡市川辺を固居しが使者を以て速に降参せらるべきなりとかけあひになりしに関東方より衆議の上返答に可及の間両三日は待下さるべしとひのべいたし閏四月朔日衆議一決の間いよく一戦いたすべきの趣使者を以ていひ入ましに上方勢より一両日ひのべといひ出しけり同三日の暁天に関東方先手下総佐倉の城主堀田備中守。上総久留里の城主黒田豊前守。并徳川旗下の人〻惣勢三千余人にて押出し。まづ山よせの小高處より志きりに大砲をうちかけ関をどつとあげておしよせたりしかバ上方勢ハいまだ夜中の事にて眠り居たる處なればひとたまりも得ずして備前藤堂をはじめ我さきにとにげ出しちりくになりて敗走しけれバよろづ一時ばかりにて事をはりぬ関東

方手疵をおひし者只三人のミ上方勢死人凡三百八十人とぞ
同日四ッ時ごろ堀田の兵士なりとて五十人ばかりある農家に
立よりいたく渇しけり水にても茶にてもあたへよといひければおとこあるじ
ければかくてちやをせんじてまゐらせける各血刀をひっさげ鉄砲を
もち中には切首をたづさへたるも有しがおひくことにあへまりて半
時ばかりも休息し居たるに市川のかた只今合戦最中なりと
きゝ又舟橋にもたゝかひありときこえて黒烟さかんにたちのぼり
是ハ打散されたる上方勢ふたゝび人数をまとめて押返したり
とおのゝきぞいそぎ人々走むかつて一動して高名せんなどいさみ
すゝんで爰を立出市川の方にむかわれしとぞ是ハ昨四日行徳の

さる方よりまゐりあり見聞しける趣を報来せるまゝ同日
九ッ時まで行徳に居たりし筑前黒田の兵三百人ばかりにて
八幡をさして操出しおのが勝敗ハいまだつまびらかならざれど尚又
今朝の風聞にハ八幡の合戦にも上方勢おほひに敗走し松戸驛
をさして落行しとぞ江戸よりも援兵として九州勢千七百人
ばかり差むかひけれども利根川のこなたに陣を取一人も川をわたら
ず只関東勢と川を隔てにらみあひて居るよし是ハ深川邊
のさるものずきの士昨四日市川邊迄見物に往たりしが帰りきたり
てものがたりなり扨市川舟橋八幡の驛々人家不残焼亡におよび
たりとなん

○このたび王政復古につき舊弊を一洗あらせらるゝの趣を聞ひれふをはじめ各國の士商ともに目を拭ひ足をそばだてゝ新令のいづるをまちたてまつるなり定めて舊來の汚習を掃清し文明なる法律を下しおかるべし舊政府の法律は拘束おほくして不便利なる事のみを好んで何事にもよらずたやすく整ふ事なきをよしとせし故の風ありてこれによりて奸吏時を得てみだりに暴威を振ひ種々の悪計を設て商賈をこまらせ以て自富の謀をなせり此等の事むかしむべきの至りなり早く此弊を一洗して公明正大なる古の王政に復しおつて萬事簡便にして差支なく貿易の出入日々に盛んになれば萬國の士商行らそひ來りて歳月を經ざるに富強の國となられん事跂立してまつべし

戸部の裁判所に目安箱を出して農商ともに民間の疾苦を述訴へることをゆるしおかるゝ上にても其の簡便なる法を貴びたまふことを知るべし

阿片烟の禁はかねて外國との條約に乗せられたれども今度またゞ厳重の令を下しあひしは我等の最敬服に堪えざる処なり阿片は悪しきもの共知りながら日本にては斯く厳禁になるほどの悪しき處を能知りたる人のすくなかるべし此故に今ここに其大畧を記すべし阿片は天竺に産する物にて

イギリス人これを買ひあつめて支那の諸港へうりさばくこと
毎年五万五千箱ぐらゐ一箱に付代洋銀五百枚左右なりこの
ものの大毒物なるこれを吸へバ次第くに精神をそこなひ色
あをざめ力おとろへつゐにはかなくなるにどもするとぞされた
一度此物を吸ひそめたればなかなかにやめることあたはざれバめし
やめる時ハ必速にその毒にあたりて死するとぞ夫故いつかなる
貧のものも携へ行きて吸ふなり此物をのむバ高直なれバ
内よ相應の身代の人にても段々貧窮に趣りわづかにハ病人の
如くにて十分の一にもみたぬものばかりされども一日も阿片を吸ねバ
叶ハ居らざれバ家財衣服を賣尽し後にハむすめをうりて田
地も家も賣て一片の烟となすものの支那人にはいくらもあること
知らまぬほどなり人を救ふ事を説たまひし釋迦如来の
本國より人を害し國を滅べき大毒物を生じ出せし事誠に
なげかしむべきなり或友人阿片烟の支那へ入津せし高を記し
たる帳面を見るべしに嘉慶元年より同治七年までの間に一億
二十七萬五千箱なり時々直段の高下ハあれども此代洋銀幾億
万枚なるべし支那國にてかゝる数大金を出して是を買ふものへ
其物ハたちまち烟となりてのこるものなし其うへ人命を害
し子孫を絶にいたるなりされバ始めのほどハ支那國にても
此事をふせぎとゞめんとして種々心を労し厳禁を立るなどせし

このたびも一度ひらきし後ハ陸路にやむことなし近来に至りては此禁(きん)なきのみならず高位の人々も又是を愛するとかや

本月四日のくれがたにイギリス公使パークス并にサトウ浪華より出帆して同六日下午本港に入れり京摂ハさまざまなれどおだやかなるよし種々新聞いづれも此次に出すべし

もしほ艸第貳篇

慶應四年戊辰閏四月十七日

閏四月四日四點鐘英國公使(イギリスミニストル)パークス氏并譯官(つうじ)サトウ氏浪華口(なにはぐち)より蒸氣船(じようきせん)にのり同六日八点鐘ごろ横濱へ入れり

天皇(てんわう)ハ此ごろ浪華に行在(あんざい)し給ふ是によりて大坂ハおのづから繁栄の體(てい)なり兵庫ハさかんなれどゆききもいまだすくなくして外國人も大坂へ開店したるもの紛の方おほし京都ハ主上おはさず故はなはださびしくなりしといへり總て五畿内中國ともにおだやかなり

○浪華のはやりうた

ときがきたればおまへがふける そこでおもぎにおびがさけ

○浪華新聞

四月十四日朝五ツ時ころより浪華元陸軍所にて調練あり諸侯二十頭の兵丁を悉く差出して叡覧あらせらるゝ一番に安藝新少將織田出雲守市橋下總守士卒を下知し金鼓をならして志づらく調練なし引退けバ二番に備前侍従北條相摸守森對馬守いりかはりて人數をもて進退周旋の状をなし暫時にして引退く三番に徳川元千代松浦肥前守池田攝津守四番に長門少將加藤遠江守小出伊勢守五番ハ細川侍従津和野侍従柳澤甲斐守六番蔦津淡路守毛利讃岐守七番にハ藤堂大學頭松平圖書頭加藤能登守いづれもかひがひしく八ツ時ごろまでいとまなくいさましくと心をきそひて兵を練り武を講じて退散せり

主上竜顔うるはしく叡感ありせ給ふとぞ

○供奉の公卿より諸大名への下シ文の寫

今般蒼生塗炭の苦を被為救度御仁恤の聖慮を以御親征被為 御出海軍 叡覧相済候上ハ關東の動静ニ依直ニ大旆を東海道へ被為向候 叡慮あらせられ候に付大總督より形情言上の次第も有之先浪華ニ行在あそばされ候に付ては供奉の輩下々ニ至る迄別して厚 御旨趣を奉戴し聊も私怨を挾ミ公事を誤り候類の儀決してこれなきやう深く心を用ひ戮力協心可遂成功候尚倍従の者心得違無之様是又名其家々において不浅様精々可相示事

一異変の節ハ各其持場を固め持場無之者ハ厳粛にして御指揮可相待候もし猥ニ奔走し混乱を生じ或ハ持場を去り他の功を争ひ候者ハ不覚たるべき事

一平生道路往来ハもちろん行軍たりともたがひニ道を相譲礼を盃し無礼いたし候者有之候ハ私ニ争論に不及其筋へ可訴出候是非曲直を正し公平の御処置可有之事

一軍中にありてハ上下貴賤寝食労逸をおなじうすべき事

一喧嘩口論かたく禁止の事

一民屋町家ニ立入乱妨狼藉ハもちろん押借押売ホかたく禁止の事

一遠乗或ハ歩行の節田畑をふミあらし農業をさまたげ道すぢの竹木を折取候等の儀有之間敷事

一浮説流言すべて人心の疑惑を生じ候儀かたく禁止候自然難差置事件聞およびハヾ速ニ其筋へ可申出候事

一猥ニ酒会を催し醜態を顕し候儀下ミにいたるまで心得違無之様其主人よりかたく可申付事

一駅路旅店等におゐてミだりに忿怒を発し小民を恐

怖せしめ候義有之まじく候事
一 貴ハ愛恤をいたし賤ハ恭敬をうしなはず上下の間礼譲を専として非礼無之誠を推候儀肝要之事
右の條々堅相守不心得之輩於有之者急度可相糺者也
戊辰四月十五日

○諸州雑報

肥前の國ながさきにきりしたんの者一揆をおこしたり是ハ法蘭西人いりこみてそゝのかせるよしなり中國邊の脱走人どもおほく此内にくはゝりておよそ三千人の餘におよぶといへり

四月十七日奥州土湯越といふ處にて合戦あり仙臺并に薩長の兵ともに三千七百餘人にて會津の兵とたゝかひしが會津方勝利のよし仙台方にておひ死人おびたゞしくありしと云

信州飯山の城を會津の兵とりかこみて攻るゆへ松城より援兵を出して飯山を救ひければ會津方敗走して越後へおちのびしとぞ

薩州より北陸道掃清の兵として蒸氣船にて兵丁を

越後路ハ往〻のしたりときこえり

○外國新聞

英國の女王その太子と新金山に遊びましゝに何者とも志らず草木のかげより鉄炮を打かけたるが太子にあたりて命にはおよぶまでならざれども甚あやうきのよしなり

○

アビシニヤといふ國ハ天竺にちかきところにありその國の王近來はなはだ暴虐にて木の杭を人の腹にうちこみあるひは人をさかさまにして地に伏せおきその上に鉄のくるまを轢きなどしてたのしみとせりこの王ハ黒人なり

ある時ヨウロツパ人の種にて十六歳になる子ありしを見てこの白人の子なりとてとらへこのたびとて牢へいれしとぞその子のおやハ昔この王の危難を救ひし事ありける者なれば惡行なくのがれし故此王ほかへ出る時の百姓ともに奔走してにげかへりしとぞ

○

支那にて北京天津の近傍に嗌匪回匪といふ両賊おこりて人數幾萬といふほどにおよびて國王そのたび追討使をさしむけられどもさらにおさまるけしきなし長毛賊とは別にして同類なり

○横濱近事

閏四月九日夜九ツ時ごろ厳重の御備にて肥前藩江戸へゆかれしよし

同十日薩州因州藤堂の兵三百人ばかり上総の木更津より横濱へ来たり金川へと肥前大村の兵五百人ほど上陸したるよし十一日ごろ江戸へ入りしとぞきこゆ敗軍の残兵なりしと噂あり

同十二日野毛町にてきびしきなるものあり官軍を誹謗したるゆゑ召捕

江戸の俳優澤村田之助去卯年九月脱疽を患ひ美國の名醫平文先生に療治を乞しに右の脚を股の處より切とりて何とか薬を用ひたりその後たのみけの前に平文の國許へ脚を注文せしが二三日前に作りものゝ足一本めりけより来りて近きうちに足を付て田之助もとの舞臺へ出るべし

但し去三月中脚一本にて江戸の三舞臺を勤めしに繁昌なりしかバ狂句に

ぶたいでは まさ たつのせうが 大あたり

句主 不知

今朝余が知己より書状至来下總國行德、舟橋、市川、八幡等の諸所ニ於て西軍と關東脱走の兵と戰争ありし勝敗得失其微細なる新聞を得たれバ次編に加へ近日出板すべし

もしほ草第三篇

慶應四年戊辰閏四月十九日

〇條約

一 外國交際ハ我 皇國の興廢ニ關係する至大至重の事件ニ付局中勤勞する役々各同心協和長短相助確乎不動の見識を持し信義を外國ニ失せざるを旨趣とし

一 局中へ勤勞するに各區分を定横濱箱館長崎神戸各傳達往返する處の公用ハ其掛の役々是を專任し首尾貫徹するを要ス故に混乱の憂ある事なし

一 局中九時ニ出勤午後一時ニ退散す間一統勉強各精力を勵し互に各般の諸事件を談論し自己の旨意ニ

滿ざる者腹臓なく其件々を説破し餘念を不可残め過失ある時ハ直ニ悔改し敢て金言耳に逆ひ良薬口ニ苦きの通弊を不可踏

右之通約束を定め其枝葉の如きハ互ニ信實を盡し精細ニ評議し第一我　皇朝の大典を以て根軸と成し宇内の通議に基き富強充實を海外ニ延及せん事を希ふ

戊辰閏四月

外國事務

小松帯刀

後藤象三郎

一　閏四月五日御觸

江戸市中取締之義町奉行江　御仰被遊旨　大總督宮様ゟ被　仰出候間一際勉勵可致旨　田安中納言殿ゟ被　仰渡候間取扱振之儀相伺候品も有之候得共右ハ追而御沙汰有之候迄前々之通相心得可申旨被　仰渡候付而者公事訴訟筋之儀者勿論都而民情ニおゐて不安之義有之候ハ無[illegible]念月番之番所江可訴出候御時節柄を憚り差扣居候族も有之趣相聞候間右之旨町中不洩様早々可相觸候

○滑耀先生日記の抄寫

戊辰四月七日下總國結城落城城主水野某官軍に屬し
たるを其子某江戸に在て此事を聞大にいかりけるを
三百年来徳川氏の恩澤を蒙りながら此期にいたりて官
軍に從ふ事甚不義なり父なりとも差置がたしとて
俄に合戰の用意を為しけるが兵士武器なとに變をなし
けれバ徳川家へたのミて大砲數挺ならびに歩兵數百人
を借請即江戸を打立ちて父のとりたる本城をとり
かこミ大砲を打かけ攻立ければ父城中にたまりかねて落
行ければ其子城に入りていまだ三日ならざるに近きわたりに
ありけれバ居たる官軍此由をきゝ不孝不忠の者なり
とて忽ちにせめおとさんと進てゆきしが志を遂ずなりにけるとぞ

八日下野國壬生の城主鳥井某者なるが官軍に屬
せるの處今日官軍より使者を以て大砲を借請たき
よし掛合に及けるが早速承引ゆるし砲術先生ら
差添借し渡しけれとぞ

九日官軍二百五六十人壬生より野州楡木鹿沼等の驛
を經て日光の方へ通行せし薩長ならびに彦根の
兵士なるべしとぞ

十日官軍二百餘人日光より二里南今市といふところへ

押寄たれバ日光奉行新庄右近將監出むかひて何
等の義にて此處へハ差向られたるぞ此處ハ徳川家
の太祖の廟所にてけるぞと申けれバ元より東照宮へ
用事ありて差向たるにてハなし朝敵板倉伊賀守
なる者日光山にかくれ居るよし聞及びつる間討手に
むかひたるなりと答ふる間さらバ暫し御待被下
べし某とくと穿鑿の上からめとりて御わたし可申とて
官軍にむかひけれバ日光山にかへりける
十一日日光奉行某ハ伊賀守をバひそかに高原越の間道
より會津へおとしやりて宗徒の家臣八人を以て

身代として官軍へ渡しけるとぞ
○今日關宿の兵官軍の先鋒として關東勢と岩井
といふ處にて戰ひけるに此關宿の兵裏切したりけれバ
官軍利を失ひしとぞ
十二日近日江戸旗下の士脱走してあちこちに屯集
するものはなはだ多し種々の隊名ありて二百人或ハ三百
人より五六百人にいたるもありとの風聞なり
十三日官軍今市を引退きて板倉がかはり八人の者
を宇都宮へ送りゆき城主戸田某にあづけおきそれより
軍使を以て喜連川・大田原・丹羽・等へ申通じけるハ

會津へ攻入るへきの間速に人數をくり出さるべき也
とゝなりしかバいづれも兼諾の趣返答におよぶといへども
會津の兵安ネ津川の邊に充満したるのよし風
聞なりされバされも兵卒を出すものなし
○今日栗橋のほとりに上よく彰義隊の兵官軍の
粮船二艘をうバひて陸地より鉄砲うちかけ忽ちに
二艘とも分捕せしとぞ
十四日常州笠間の兵卒三百人余官軍の命を受
野州宇都宮の援兵として操出し栗橋驛にて兵
粮をつかひゐるをしらず彰義隊の兵驛ちかづきの參

田の中に埋伏して待居たるに案の如く笠間の兵卒
どもりうちきたれバねらひすまして打出しける鉄砲に
不意をうたれて散々になりて敗北しけるが手
負死人もなかなかおほしとぞ
○今日徳次良にても合戦ありしと風聞なり
十五日江戸脱走の歩兵二百餘人東寧川を下り總導寺
河岸より上陸して下妻陣屋の役人を説伏せ大砲壹挺
砲兵三十人金八百両を借うけ夫より官軍の屯集したる
關本といふ處へ押寄日の八ツ時ころより合戦はじまり
夕六ツ時過までたゝかひしが關東方勝利にて官軍敗

笠間の兵多半討死したるよし之
○此日小山とおゐだの間にても合戦ありてこれにても官軍不利のよしにて江戸脱走の兵士二百八十五人分捕の武具或ひ首などたづさへ大平山へのぼりて下宿したりしとぞ
○又下總の竹の原にても官軍と會津勢とたゝかひしと風説あり會津勢關宿をやぶらんとせしともいへり
○又一手の關東勢絹川をわたりて久保田河岸より結城へ攻入べしともいへり

右滑耀先生日記十六日より閏四月五日迄の處は第四編に出すべし石橋小山合戦并宇都宮の戦争甚だ詳也

○

去ル十三日夕七ツ時頃相州箱根の下真鶴の湊へ蒸氣船三艘着岸し大久保加賀守江届ケハ徳川家脱走三百人乗込休泊いたしたきよし相届ける故小田原より役人出張ありし相改めしところ雑兵平士ともにてハ凡三千人ほども有之趣キ翌十四日町觸出し由

戦ふべ
むさし野のつはものをいさむ常州の菊に
露のこぼるゝをおそれぞわづらふか
讃人 某

○

こゝくは来る家蜂の巣を掘りけり　究穂

うき萩や川起されぬ家の坪　岐岐

春風のより白ひさらふや梅の花　蛇挠

ちるとも何となからめん寺の庭　一柱

松かぜに傍に寝て居る寺の永さ　寄舟

粉を吹ひり流る寺の精の一つ也之　鯢淵

おちまわるとぬきひとの賑さ哉　鹿ノ子

○滑稽先生日記のつゞき

十六日

朝五時ごろより會津兵と称し百五十人ばかり結城へ打入り鉄砲をうちかけければ官軍よりも人数をくり出したゝかひければ會津兵おもひのほか敗走しければ官軍勢に乗じて竹井村といふ處まで追掛けるが伏勢四方よりおこり立て鎗鋒をそろへて突きかゝれば官軍おもはぬ狼狽しやうやく一方をきりぬけて絹川をわたり関本といふ

處までにげのびてちり〴〵になりたる士卒ども
またあつまらんとこれをきゝつけるに薩軍隊の兵
あつまりにおしよせて一齊に鉄砲をうちかけしかばかれが
官軍ひとたまりもなくまろび敗走し歡喜院ならび
に名主七九郎が宅其外民家に火をつけてその
ひまに船玉といふ處までおちのびしがなほも江
戸脱走の兵よせきたるとて又々絹川をこえて久保田
村に火をつけ其まゝ退に結城を通りぬけ夜の
五時ごろに小山の驛にいたりてやどりける
○十四日よ栗橋にて敗軍したる官軍の手負死
人をけふ眞壁の陣屋へもちはこびけるとぞ

十七日

きのふ討もらされたる井伊藤堂の兵あちこち
より小山へあつまりける處に朝四時ごろ一手の關
東勢驛外まであしよせて時の聲をどつとあげたりしが
をいどみけれバ官兵よりも鉄砲をうちかけてしばし
たゝかひけるが官軍ハ且たゝかひ且退きけれバ
驛の東の麥畑の中まで追つめられて一時ばかりが
ほどはげしくたゝかひけるところに壬生より
加勢の出しけれバ官軍是に力を得てさんざんに

に八時過とおぼしき頃東照宮の旗をおし立て關東勢おびたゞしくおしきたりけれバ官軍大ニ敗走し木沢の人家へ火をかけて退きさりにけり本城さして逃かへりたるぞ壬生勢ハ先手の大將を打とられしかバひとまきへもさゝへずにおちのがれたるが石橋驛にとゞまるもあり宇都宮までおちのびしもあり倒ふしたる手負死人其數しるべからず扨關東方ハ夜五時ごろに小山の宿ニ引かへして分捕したる品々を點撿しけるに錦の旗一流井伊家紋の旗二流大砲十四挺小筒十挺鎗十七本馬四疋

白米二百俵金四千五百両生捕七人關東勢討死五十六人その内かしらだちたるもの二人を葬て手負を介抱などしてそこく支度をのひけれバそれより夜の内に宇都宮へ押寄て殘兵どもをおひちらさんとて先されふれをぞ出しけるが九ツ時とおぼしきころ關東勢のこらず小山を引はらひて太平山へぞのぼりける

○今日東照宮の祭禮なればとて徳川家の旧臣ども昨日生捕たる井伊家の兵の首を切りて日光山へ持行て神前にそなへけるとぞ

○今日仙臺ならびに薩長の兵と會津を打
とて土湯越といふ處まで出向しに會津より
防の兵を出しく嶮岨の間にたてこもりけるが仙
臺勢敗走のよし風聞なり

十八日

きのふ討死せる官兵の死骸石橋と小山の間に
よこたはりて算木をならべしたるが如くなれ
どもたまたまとりあぐるものもなくけふもそのまゝ
にしてさらしおかるよし風聞しまた投官軍宇都
宮にたてこもりゐるよしをきゝて諸方に集り居

たる關東勢ひそかに襲撃の用意をなし
ありける

十九日

大平山に篭り居たる彰義隊貫義隊大久保
黨會津勢其外諸家の脱走人都合三千七百
余人早朝より宇都宮城をとりかこみ攻よりけるが
そろくしれたゝかひにもなくかぎりしこの鎮守明
神の社とく少し小高き所なりけれど彰義隊
の兵ども大砲数挺を其上に引あげて無二無三に
打立ければ城の内外一圓に火焔となりて官

軍大に敗走しけるが城主戸田某も討死しける
ともいひ又關東方へ降参したりともいへり

二十日

昨日ゆふつかたに宇都宮落城したりとは是も關
東勢四千餘人夜の中に城へいりかはりて東照宮
の旗日の丸の旗数十流おしたてゝ今や敵の
寄せくるものと待居たりけるに官軍は大半南
をさして落行たるときゝてさらばこそとて
壬生へおしよせ其罪をたゞすべしとて城には
守の兵をのこしおのれ九時ばかりに三千餘人にて

くり出したり
○きのふ生捕たる上州の参謀ならびに彦根
壬生の陣代の首をきりて獄門にかけたりける
三百年来徳川家の恩澤を蒙りながら敵對
いたしゝ者につき梟首になさるゝものなり

○ 雜報

○廿一日より是迄の第五篇に加へ引続き出板

○八王子よりきこゆるところのはなしに驛のかう
むるの榜示に　天朝御領　江川太郎左衛門支配所と
かきたてたりけるを彰義隊の者どもおし
たふしけり
○十三四日のころ彰義隊のもの三百六十人ばかり八王
子へいりこみ驛の東西の口に關をすゑて西國武士
とおぼしきものをみれバかくるゝまでさがしもとめ
とりかこみきりておひやりたびびとをもきびし
くいましめくるしめけるとぞ
○八王子の千人同心ども日光山の番に毎年五十人

ゆき六月朔日よりこのかはりになる例なり此月初の頃
日光山を官軍にめしとられて五十人のものども
八王子へにげかへりたるとぞ
○この十七日にふらんすよりふらんすの官人きたれり丁人の
モニテヲー　ひとりはバアセレー　とて江戸家のおやとひの
あきんどの四人なるものあり
○横濱の集會所といふものもと江戸家のころ奸商ども
奸吏となれあひその奸をほしいまゝにせんためにこしらへ
たる所なりしのちその舊弊を一洗ひらかせらるゝ
あの邊がまづその所をぞまうしあらん昨日其奸魁

たる石炭屋多右衛門茶屋勘助芸人屋祐次郎等を捕
捕て裁判所の獄にとめ置るゝこそ悲しくこれまで
日本の商人ハほんとうのあきなひをしたるものなき
ゆゑに商法をしらずしてみだりに私法をたてゝ中
間或ハあぶなきと称しあきなひの世まくなるやうに心を
めぐらせりこれハおのれひとりにて利を志めんとの好より起る
ものそはなはだしきあほうものなりさいはひに
王政御一新の時にあひてかゝる汚習をのぞき和ひあふべきの
おほみくにの繁栄の基なるべしと西洋の人ともよろこび
あへり